学生記者の

多摩ぶらり散歩 2

高幡不動尊

中央大学の周辺には、さまざまな史跡をはじめ、豊かな自然やお楽しみスポットが数多くある。でも、意外と気づいていなかったり、知っていてもなかなか行くチャンスがなくて、いつも素通りという人が多いのではないだろうか。そこで学生記者がお薦めスポットを紹介する。題して『学生記者の多摩ぶらり散歩』。はたして、何やら新発見がありますでしょうか―。

新撰組副長　土方歳三の菩提寺

風物詩「たかはたもみじ灯路」

秋深まる11月下旬、各地で紅葉の見ごろを迎えている。

中大生を始め、多くの学生や社会人が通勤通学ルートの経由地として使う京王線高幡不動駅。最近になって大きく様変わりし、明るくきれいで、スムーズな乗換えが出来るようになった。駅にほど近い高幡不動尊金剛寺。古来関東三不動のひとつとして知られ、地元が生んだ幕末の勇士、土方歳三の菩提寺としても有名なこの地をフォーカスしてみた。

11月23日。この日、記者が向かったのは、少し前からポスターに記されていた「たかはたもみじ灯路」である。参道を中心に約2000個もの灯篭が路上に置かれる壮大なライトアップは、今年で3回目を迎える。まだ生まれたての風物詩だ。

18時を過ぎると辺りは真っ暗になる。いつの間にか日が沈むのが早くなった、と考えながら駅前の角を曲がると、とたんに目の前に灯りによる道が浮かび上がる。

路上に灯る2000個の灯篭

いつも賑やかな雰囲気をみせているはずの商店街は、照明が落とされ、存在感を消す。幻想的なその風景の先には、五重塔が見えている。特設ステージで演奏されるギターの音や、道の脇で売られる玉こんにゃくの温かくてしょっぱい香り、そして、ロウの溶ける匂い。すべてが彩りを添える。街の、新しい表情だ。

夜陰に浮かびあがった紅葉

「もみじまつり」も重なる 人生の想いを「浮灯明」に

境内に入ると、たくさんの人が行き交う。「もみじまつり」に重なっているこの日は、晩の散歩に高幡不動を選ぶ人も多いのだろう。家族連れや夫婦、友達同士が行き交う。カメラを手に手に、ファインダー越しの会話を楽しんでいる。面白いことに、お面やハッカパイプに混じって乾物や唐辛子の出店が流行っていた。場所を考えると、集まる年齢層が若干上の世代だからだとうなずける。

幻想的な五重塔

階段を上ると、五重塔から大師堂にかけて灯りに照らし出されたもみじが素晴らしく、青空の下とはひと味違った趣。葉のかたちが光を切り取っていた。「すごい、すごい！」と言いながら何枚もシャッターを切る記者をみて、ついて来てくれた後輩が笑う。「きれいに撮れました？」

同時に開催されていた萬燈会（まんどうえ）は、五重塔を囲む水面に「浮灯明」と呼ばれる小さな灯ろうを流す。本来は供養のための催しであるようだ。よく見ると、一つひとつに「家内安全」「合格するぞ！」「長生きする」と願い事が綴ってあった。そのスピードは驚くほどにゆっくりで、人それぞれの人生の想いを重さに変えて灯ろうに乗せているようにも見えた。

道端に野菜を使った生け花 楽しみな四季折々の「まつり」

スピーカーが配置されており、先ほどのステージから音を引いて、こちらにも中継している。立ち止まって耳を傾ける人もいる。階段を下りながら目にする景色は、オレンジ色の灯りに照らされた秋祭りの儚さが印象的だ。

散策を終え駅に向かう途中、来たときとは反対側の歩道を通ると、野菜をつかった生け花が大きく飾られている。道端で見るにはもったいないほどの迫力。秋の季語でも知られる冬瓜にはお茶目な顔が描かれていた。思わず笑みがこぼれる。

野菜を使った生け花

やはり夜になると寒い。マフラーに顔を埋めながら、こんなにも秋がつまっている場所が身近にあることに安心を覚えた。高幡不動では、花まつり、あじさい祭り、菊まつりなどを通じても様々な四季を感じられる。時間をつくって、12月に行われる「星まつり」にも来てみたい。

皆さんも仲間を誘って、また、たまにはひとりで、高幡不動駅にほど近い高幡不動尊金剛寺の散策をしてみてはいかがだろうか。きっとあなただけの新しい気付きがある。

（学生記者　竹下奈穂＝経済学部４年）